

鳴突き

寺田寅彦

青空文庫

「鳴突き」^{しそうつき}のことは前に何かの機会に少しばかり書いたことがあったような気がするが、今はつきり思い出せないし、それに、事柄は同じでも雑誌『野鳥』の読者にはたぶんまた別な興味があるかもしれないと思うからそういう意味で簡単にこの珍しい狩猟法について書いてみることとする。

高知市附近で「鳴突き」というのは、蜻蜓^{とんぼ}を捕えるのと同じ恰好の叉手形^{さでがた}の網で、しかもそれよりきわめて大形のを遠くから勢いよく投げかけて、冬田に下りている鳴を飛び立つ瞬間に捕獲する方法である。「突く」というのは投槍のように網を突き飛ばす操作をそう云つたものではないかと思う。何しろ、もう三十余年前にただ一度実見したきりなので記憶がはなはだたしかでないが、網を張つた叉手の二等辺三角形の両辺の長さが少なくも九尺くらいあり、柄竿の長さもほぼそのくらいあるかと思われ、とにかくずいぶん大きなものがあるので、それを自由に操作するには相当の腕力を要するものであつたようと思う。網目はどのくらいの大きさであつたか覚えないが、霞^{かすみあみ} 網などよりはよほどがつしりしたものであつたらしい。

明治三十四年の暮であつたと思う。病氣で休学して郷里で遊んでいたときのことである

が、病氣も大体快くなつてそろそろ退屈しはじめ、医者も適度の運動を許してくれるようになつた頃のことであつた。時々宅の庭の手入れなどに雇つていた要太という若者があつて、それが「鳴突き」の名人だというので、ある日それを頼んで連れて行つてもらつた。

それは薄曇りの風の弱い冬日であつたが、高知市の北から東へかけての一面の稻田は短い刈株を残したままに干上がり、しかもまだ御形^{ごぎょう}も芽を出さず、落寞として霜枯れた冬田の上にはうすら寒い微風が少しの弛張^{しおよつ}もなく流れていった。そうした荒漠たる冬田の中に一羽くらい鳴が居るのを見付け出すということは到底素人には出来ない芸当であつたが、さすが専門家の要太の眼には、不思議なフィルター・スクリーンでもあるかのように、実に敏感に迅速にそれを発見するのである。

片手を挙げて合図をして「居た居た、あそこに」と云われても、どこにどんな鳥がいるのか明き盲の自分にはちつとも見えない。しかし「胸^{むなぐら}黒^{くろ}じや」などと彼は独り合点をしているのである。水平に持つて歩いていた網を前下がりに取り直し、少し中腰になつたまま小刻みの駆け足で走り出した。直径百メートルもあるかと思う円周の上を走つて行くその円の中心と思う辺りを注意して見るとなるほどそこに一羽の鳥が蹲つ^{うずくま}っている。そうしてじつと蹲つたままで可愛い首を動かして自分のまわりをぐるぐる廻つて行く不思議な人影

を眺めているようである。その人間の廻転する円の半径がだんだん小さくなるに従つて、鳥から見たそれの角速度は半径と逆比例して急激に増大して来るのであるから、鳥の注意と緊張もそれに応じて急激にしかし連續的加速度的に増大を要求されるであろう。そういう、鳥にとつてはおそらく生れて以来かつて経験した事のない異常な官能行使の要求に応じるに忙しくて、身に迫る危険を自覚し、そうして逃走の第一歩を踏出すだけの余裕もきつかけもないのであろう。ともかくも運命の環は急加速度で縮まつて行つて、いよいよ矢頃はよしといふ瞬間に、要太の突き出した叉手網^{さであみ}はほとんど水平に空^{くう}を切つて飛んで行く。同時にばたばたと飛び立つた胸黒はちようど真上に覆いかかつた網の真^{まつ}唯^{ただ}中^{なか}に衝突した、と思うともう網と一緒にばさりと刈田の上に落ちかかつて、哀れな罪なき囚人はもはや絶体絶命の無効な努力で羽搏^{はばた}いているのである。飛ぶがごとく駆け寄つた要太の一^{ひと}捻りに、この小さな生命はもう超四次元の世界の彼方に消えてしまつたのであつた。

「鳴突き」を実見したのは前後にただこの一度だけであつた。のみならず、その後にもかつて鳴突きの話を聞いた事さえない。従つて現在高知にそういう狩猟法が残存しているかどうか、また高知以外の日本のどの地方に過去現在のいずれかに同様なものが行わされて来たかどうか、ということについても全然なんらの知識も持合わせていない。しかし、それ

だけにまた、自分にとつては三十余年前の冬のある曇り日のこの珍しい体験が、過去の想い出の中に聳え立つた一里塚のように顕著な印象を止めているものと思われる。

「鳴突き」は鉄砲で打つのと比べれば実に原始的な方法のようであるが、また考え方によると一つのスポーツとしてはかなり興味の深いものではないかという気もする。単になるべく沢山の鳥を殺して 猟囊^{りょうのう}を膨らませるという目的ならとにかく、獲物と相対してそれに肉薄する緊張が加速度的に増大しつつ最後に頂点に到達するまでの「三昧」の時間に相当の長さのあることだけから見てもこれは決してそれほどつまらないものではないだろうと思われる。少なくも 鴨獵場^{かもりようば}で「鳴をしやくう」のに比べると獵者の神経の働くせ方だけでも大変な差別があるような気がするのである。

古いことがぼつぼつ復活する当代であるから、もしかすると、どこかでまたこの「鳴突き」の古いスポーツが新しい時代の色彩を帶びて甦生^{そせい}するようなことがないとも云われないであろう。

この方法が鳴以外のいかなる鳥にまで応用出来るかということも、鳥類研究家には一つの新しい問題になりはしないかと思う。これがもし他の色々の鳥にも応用されとなれば、鳥を少しも傷つけないで、生きた健全な標本を得るための一つのいい方法になるかもしね

ないという空想も起つて来る。

しかしこれらの点についてはむしろ本誌の読者の側から示教を仰ぐべきであろう。以上はただ全くの素人の想い出話のついでに思い付くままの空想を臆面もなく書付けて見ただけである。

（昭和九年十二月『野鳥』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「野鳥 第一巻第八号」

1934（昭和9）年12月発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana Ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

鳴突き

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>